

# 教育データ利活用の推進に 向けた取組について

# 教育データ利活用のステップ（β版）について①

- 教育データ利活用を今後全国で進めるために、必要な今後の課題の一つとして「各自治体における実装支援」があげられているところ。
- 「教育データ利活用のステップ（β版）」は、「教育データを利用したいけれど何から始めたら良いか分からない」という教育委員会の担当者を主な対象とし、教育データを利用していくまでのステップについて解説したもの。

※ 本文書は「β版」として、現時点で想定される内容を整理したものであり、今後の実践や議論を踏まえて、ブラッシュアップを重ねていく予定。

## 「教育データ利活用の実現に向けた実効的な方策について（議論のまとめ）」（抜粋） （令和6年3月 教育データの利活用に関する有識者会議）

### 3. 今後に向けた課題

#### 3-2. 教育データ利活用のための標準的なシステム構成の提示、各自治体における実装支援

- 全国の教育委員会及び学校で教育データ利活用を推進するためには、各自治体が、それぞれのニーズに応じて、様々な学習ツール、OSソフト、学習 eポータル、校務支援システムなどを選択し、データの相互運用性を確保したシステムを導入して、維持していくことが重要であるが、必ずしも進んでいるとは言えない。
- その理由として、3-1. に述べたようなデータ利活用の意義、各ニーズを満たすためにどのようなシステム構成が必要かについての理解が十分ではないこと、校務系・学習系のネットワーク分離の問題や、個人情報保護やセキュリティ面の問題などに加え、システム調達の準備からシステム構築・運用開始まで、一から全てを作っていくことは、費用面でも調達に必要な専門知識の観点からも負担が大きく、実施が困難であるからだと推測される。
- こうした状況を前提としつつも全国の自治体でシステム導入を進めるためには、国において、図1を踏まえつつ、関係者の意見も聞きながら、データの利活用の基盤として全国的に取り組まれることが望ましい部分と、利活用の主体となる教育委員会や学校の判断で選択する部分を区別して標準的なシステム構成を示す必要がある。
- 加えて、国は、自治体がそれぞれの実態に応じ、選択的かつ段階的にシステム導入に係る取組を始められるよう、さまざまな切り口から支援することが急務である。支援の例としては以下のようなものが考えられる。
  - 各自治体がシステム導入を検討する際の参考となる、調達時に共通に備えることが望ましい技術的要件を整理した資料の提示と、導入の実証とその知見の共有  
(以下略)

# 教育データ利活用のステップ（β版）について②

## 目次

- I. はじめに
- II. データ利活用の重要性と具体例
- III. データ利活用の手法・環境整備における3つのパターン
- IV. データ利活用の手法・環境整備のステップ

- 1. データ利活用の目的を定める
- 2. 利活用するデータを定める
- 3. データ利活用のパターンを選ぶ

### (1) データ利活用パターン1 (単一ツール・システムを用いたデータ利活用)

- 4. データ利活用を実行する
- 5. 効果や課題を確認する

### (2) データ利活用パターン2 (データ連携機能付システム（仮称）による複数ツール・システムを用いたデータ利活用)

- 4. データの現状を整理する
- 5. データ連携機能付システム（仮称）を調達・導入する
- 6. 効果や課題を確認する

### (3) データ利活用パターン3 (独自に構築したシステムによる複数ツール・システムを用いたデータ利活用)

- 4. データの現状を整理する
- 5. システム構築前の検証をする
- 6. システムを調達・導入する
- 7. 効果や課題を確認する

## V. データ利活用の際に気を付ける点

## VI. 用語集

## 教育データ利活用のステップ

1. データ利活用の目的を定める

2. 利活用するデータを定める

3. データ利活用のパターンを選ぶ

パターン1を  
選択した場合

4. データ利活用を実行  
する

5. 効果や課題を確認  
する

パターン2を  
選択した場合

4. データの現状を整理  
する

5. データ連携機能付システム  
（仮称）を調達・導入する

6. 効果や課題を確認  
する

パターン3を  
選択した場合

4. データの現状を整理  
する

5. システム構築前の実  
証をする

6. システムを調達・導  
入する

7. 効果や課題を確認  
する

## 教育データ利活用のステップ（β版）について③

	特徴
<b>【パターン1】 単一ツール・システムを用いたデータ利活用</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>● OSメーカーが標準的に提供する教科横断的に活用できるソフトウェア、学習ツール、学習eポータル、校務支援システムなどのツールや、各ツールに付属するダッシュボードなどを利活用する。</li><li>● 単一のツール・システムのデータを単独で活用する場面で用いる。</li></ul>
<b>【パターン2】 データ連携機能付システム（仮称）による複数ツール・システムのデータを用いたデータ利活用</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>● データ連携機能等を統合的に含むシステム（学習eポータル、校務支援システム等）（以下、「データ連携機能付システム（仮称）」という。）を活用しながら、複数のツール・システムのデータを、データ連携機能付システム（仮称）に付属するダッシュボードなどで可視化して、データを利活用する。</li><li>● 自由度は限られることが想定されるが、複数のデータを用いたデータ利活用を始められる。</li></ul>
<b>【パターン3】 独自に構築したシステムによる複数ツール・システムのデータを用いたデータ利活用</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>● システムを構築し、独自のデータ連携基盤やBIツール等を活用して、複数のツール・システムのデータを目的に合わせ可視化して、データを利活用する。</li><li>● 難易度が高いことが想定されるが、自由度が高く、より自治体のニーズにあったデータの利活用を進められる。</li></ul>